子どもと環境
～一般市民の立場から～

主婦
山﨑　理華

私は、現在、石川県に在住し、二男二女の４人の子を持つ母親で、私の両親とも同居しており、家族は合わせて８人の大家族です。
家族のために日々慌ただしく過ごしながらも、近くの子育てサポートセンターにおいて、他の方々のお子さんの子育てのサポートも時々しているごく普通の主婦です。

今、私たちの身の回りには、実に多くの種類の物が満ち溢(あふ)れています。
そして私たちは、これらの多くの多様な物に囲まれて便利な生活を送っています。
この身の回りの便利なものの多くは、化学物質で構成され人工的に製造される工業製品から成り立っています。
しかし一方、これら私たちの身の回りの便利な物の中にも、誤った使い方や後始末の仕方などによっては人間や環境に何らかの悪影響を及ぼすことにもなるのではないかと、何となく不安な思いを抱くときもあります。

私は、これら日常生活に溢れ、今や生活に無くてはならない多くの化学物質の健康影響に関する素朴な疑問について、日々、自分の子や他のお子さんの世話をしている育児中の母親として、また一主婦としての目線でお話ししたいと思います。

私は、子どもの送り迎えや買い物など、日常生活において、その必要上、車を頻繁に使いますので、家の前で洗車をよくします。
その際には、洗剤も勿論、時々使います。
先日は主人が「洗車が楽になる車用洗剤」等をネットで購入していました。
ただ水で洗うだけでは綺麗にならないそうです。

私自身は、車は多少汚れていても気にしないのですが。

また、私も家族も体を清潔に保つ為に、毎日、お風呂に入ったり、洗面所で顔を洗います。
その際、石鹸やシャンプー・リンス、さらに、歯磨き粉やハンドクリームなど、様々な日用品を使いますが、その種類は結構いろいろで、それらを数え上げたら枚挙にきりがありません。
このように、私たちは日々何気なく日用品を使っているわけですが、今、改めて考えてみますと、これら日用品の多さには本当に驚かされます。

そして私の家の周りには、片側は川、反対側は田んぼが広がっており、裏の畑には柿や栗、梅の木々が生い茂っています。
そんな四季折々の自然が身近に感じられる所に住んでいることもあり、家の窓を開けていなくとも、何処からともなく虫が入って来ます。
ダンゴ虫なんかは、子どもが捕まえてそっと外へ逃がしてやりますが、蚊やハエ、時にはムカデなんかも侵入してきます。
そんな時には虫を殺すために殺虫剤スプレーをかけ、蚊取り線香や蚊取りマットをたきます。
そして家の周りに虫の侵入を防ぐ薬剤を撒いたりもします。
隣の田んぼでは、除草剤かなにかの薬剤散布が行われたりもします。

このような時、少量でもそれらの「匂い」がします。
「匂い」がするということは、少なくともその散布された物質が鼻につき「匂い」となって感じるのですから、ごく微量ではあるけれども、その物質が体に入ったという事になるのでしょうか？
そして、ごく少量なら健康にはなんら影響はないと思いますが、散布をしている人や、工場や現場作業などで、微量だけれども長期にわたって吸い続けたりすると、なんらかの悪影響を受けるのでしょうか？

このような疑問を長年ずっと思っておりましたら、ちょうどこの間、専門家の方から「環境リスク」という言葉について伺う機会がありました。

環境リスクということは、空気や河川・海などの環境中に出された化学物質が、ヒトや動植物に悪い影響を及ぼす可能性のことを「化学物質の環境リスク」と呼ぶと聞きました。

そして、その環境リスクの大きさというのは、有害性の程度とその化学物質が人体に取り込まれたり、環境中に存在する量によって決まるとお聞きしました。

強い毒性のあるものでも、限りなく少しだけなら、比較的大丈夫だけれども、逆に、弱い毒のものでも、たくさん体の中にはいると、影響が出てくる可能性が大きくなるとのことです。

私はこれまで、有害なものは量にかかわらずヒトや環境にとって有害であると思っておりましたが、少し勉強になりました。

また、先日の地元新聞に、私の住んでいる県の先端沖にある島の松が枯死していて、調査の結果、松くい虫ではなく酸性雨が原因との記事が掲載されていました。

これは、松に限らず他の農作物においても、例えば少量の酸性雨でも長期にわたって浴び続けた場合には、作物などにはやはり影響があるのか、農家を間近に見ている私としては、無関心ではおれません。

また、同日の新聞内に、「環境病対策が急務」との大きな見出しの記事もありました。

カドミウムによるイタイイタイ病やメチル水銀が引き起こした水俣病を紹介し、高い濃度ではなく、普通に食べる分には健康に害はないとしながらもその一方で、低濃度のカドミウムを慢性的に摂取した場合の健康への影響や、メチル水銀の毒性発現のメカニズムなど、現在もわかっていない点が非常に多いことも指摘されておりましたが、本当のところはどうなのでしょうか？

イタイイタイ病については、小学校の時に授業で習った折、触れただけで骨が折れてしまうので、患者達は「痛い～痛い～」と言いながら亡くなっていくと聞き、子供ながら大変な公害病だと感じました。

また、昨今、化学物質などによるアレルギーについても、報道されているのをよく耳にするようになりました。
アレルギー体質になっている子どもが多くなってきているという話も聞きます。
私の住んでいる石川は、春には黄砂が混じった雨が降り、車はドロドロになりますし、また花粉も飛び交います。
アレルギーのような反応を起こしたとき、黄砂によってなのか、花粉によってなのか、ともに時期的に重なるので、どちらでクシャミや目の痒みが出ているのか、私にはよくわかりません。
かかりつけの耳鼻科のお医者さんに聞いてみようかと思っています。

ただ、アレルギー症状が出たときには、その症状を緩和させるために薬を飲んでいます。
しかし、このときに処方される薬もまた、考えてみると化学物質です。
この薬といった分野の化学物質も、その人にあった適量を服用することで、健康を保つ、又は取り戻すことができるわけです。
これも先ほどのリスクの考え方にかなっているように思えます。

そして実は、私自身もアトピーを持っています。
幼少期から、顔、首、手足の間接部に強い痒み、湿疹がありました。
現在は、ステロイド薬での治療で、体の湿疹はごく小さなものになりました。
しかし、なぜか手荒れだけはひどくなる一方です。
お皿を洗う時はもちろん、掃除の時も手袋は欠かせません。
そして、お風呂の時も、シャンプーや石鹸等で手がカサカサにひび割れてしまうので手袋をして入ります。
ひどい時は皮が硬くなり、指が曲がらなくなります。
そんな時は手の痛みで何をするにも億劫になってしまいます。

この手荒れが始まったのは、長男、次男を出産後、電子関係の工場に勤め出してからでした。
PC 組み立ての生産ラインの最後に電源を通して確認する作業でした。

その作業は電源コードを右手で持って機械に差込通電する作業でした。
その際電源コードが右手の親指と人差し指に擦れる形になり、日に何度も何度も繰り返すので、そこの部分だけ皮膚が乾燥するようになりました。
それからしばらくして、その現場は離れましたが、それ以後、素手で洗剤などを扱うと右手には湿疹ができ病院へ行くと「主婦湿疹」と言われました。
しかし、薬を塗ってもよくなることはありませんでした。
あの時に何らかの影響を受けて、そういった症状が引き起こされたのでは？と思っています。

そして、私には４人の子どもたちが居ます。
上の子２人が保育園生だった頃は、アトピーで専門的に病院へ通院している子どもは私の周りには見かけませんでしたが、その７年後、３人目の長女が生まれた頃からは、長女のお友達の中に何人ものアトピーや、何らかの食物アレルギーを持った子達がいるようになりました。
最近では、卵アレルギーはめずらしくなくなりました。
長男の時には見かけなかった「アレルギー用の食品」がスーパーなどで身近に手に入るようになりました。
幼児用おやつで、アレルゲン除去の物が、多く普通のスーパーに並んでいます。
それほどに今日では需要が大きく伸びるほど、アレルギーを持った者が増えているのでしょうか。

そして、私の子ども達が通っている学校給食でも、来年度から「アレルギー対応給食」が始まります。
除去食、代替食、特別食と、食べられない物を取り除いたり、他のものに変えて提供されるそうです。

このようなアレルギー疾患については、多くの専門家の方によって、私たちを取り巻く環境が最近変化してきていることが大きな要因になっているのではないかといわれています。

やはり環境が私たちに与える影響は、私が思う以上に少なからずあるのかもしれません。

また、子どもは、大人よりも何に対しても弱いわけですが、身の回りにある環境中の化学物質などに対しても、大人よりも傷つきやすいと聞きました。

例えば、昔、サリドマイドという薬を服用した母親の体内にいた胎児に、アザラシのような手足の子どもが生まれるという事件があったと聞きました。
これも専門家の方に伺うと、胎児のある時期にこの薬の影響があった場合にこのようなことが起こるということが、後に明らかになったとのことです。

私も 4 人の子が妊娠中には色々と気をつけていましたが、妊娠初期の薬の服用については周りのお母さんたちからもよく心配だと言う声を聞きました。
妊娠に気づかずに「風邪薬を飲んでしまった」「飲み会がありたくさんのお酒を飲んでしまった」「タバコを吸っていた」等です。
一番の心配は子どもへの影響ですが、無事に生まれれば、影響があったのかなかったのか、についてはナカナカ目に見えてわかりません。
後に、私の長男のように、脳のなんらかの機能障害である「発達障害」があったとわかっても、その原因まではわかりません。
親としては当然、なぜ？と悩みますが、その原因についてはわかるはずもなく、ただただ前を向いて進んでいかざるを得ません。

また、私たちが不安を抱く一端に「メディア」の役割も一部あります。
例えば、少し前にメディアで、人体に取り込まれた「ダイオキシン」が母乳に排出されるという話がありました。
一時期、その話題が広く取り上げられ、「母乳はよくない」といった風潮も世間に生じておりました。
メディアでは、問題視された時は大々的に取り上げますが、その後の経過までは必ずしも報道されないような傾向も、時としてある場合もあるのではないでしょうか？

従って、一部の情報や一時的な情報にとらわれず、常に問題に対して関心も持ちながら、幅広い情報を得ていくようにしていかなければならないのではないかと感じております。

このように、子どものある時期に影響を与えるということも、私にとっては驚きですが、これらのことについて、このシンポジウムで多くの専門家の方々から、私たちにも分かるように、現在解明されている最新のことがらを聞かせていただければと思い、このシンポジウムに参加させていただきました。

いわゆる自然や空気、水などの大きな環境からの影響と、家庭の中での洗剤や薬等の身近な化学物質に囲まれた小さな環境からのリスクは、実際の所なかなか分けることはできないと感じます。
それらは密接に関連し合っているからです。
そしてその人が受けた環境リスクは次の世代へと受け継がれてしまうのでしょうか。
それが、今の1番の漠然とした疑問です。

とりとめのない話となってしまったかもしれませんが、その点お許しをいただき、一主婦として、身近にある様々な日用品と私どもの健康や環境への影響との関係について、日頃より感じましたことを率直に語らせていただきました。

どうぞ宜しく、お願い申し上げますとともに、私自身もこのシンポジウムでのお話しをしっかりと聞いて、大いに勉強させていただければと思っております。

終わりに当たり、このような国際シンポジウムで、一主婦の立場で話す機会を得ることができましたことと、このような大きな舞台に出るにあたり色々と世話をしてくださった多くの方々に感謝申し上げますとともに、私の話が少しでも皆様方のお役に立てますことを心より願っております。

ご静聴ありがとうございました。